

モグラの兵隊

(第2部)

博物館動物園駅  
京成電鉄株式会社

カナタ ムメイ

ノンノン様はわたしにそう話すと、ジャンクは死んでしまったこと、わたしはジャンクと同じく追われる身になるだろう、と告げ、布団の中に潜ってしまった。

英語塾の階段をゆっくりと下りた。そとは曇り空で、どこかで焚き火をしているらしく煙った町並みだった。どぶ川に渡してある狭いブロックを落ちないように慎重にわたった。

ユキは行方がわからずに失踪してしまったし、ジャンクはノンノン様の言うとおりに死んでしまったのだろう。わたしが見た小林の拷問部屋の印象はたびたび強烈に目に浮かんだ。私もジャンクと同じくこの世界で追われつづけるのだ。そもそも小林が夢世界の維持として存在する理由を知りたかった。治安取締局や空中警察がそこまでして守る夢世界とは何なのか。そして脱出はできるのか？もし脱出が可能ならば脱出してしまうことだ。罪悪感は心に残ることだろうが、夢世界で消去されるよりもましという気がした。一方、そうすることで、夢をもう見る事ができなくなってしまふ、夢を失うこととの引き換えのようにも思えた。果たして人間に夢というのは本当に必要なのだろうか？

「なに、どうしたの？」私をはじめに会った女がシンゲンを連れて現れた。

「追われることになった。ユキはいないし、ジャンクは死んだ」

「取締局ね」

私は肯いた。女は以前モグラの兵隊が追われつづけるといっていた。私は、

「モグラの兵隊に志願したわけでないのになぜ追われるんだ？」というと、

「キャップを持っているからよ」と答えた。

「捨てるわけにはいかないのか？」

「馬鹿なこと言わないでよ、そんなことをしたらすぐに捕まっちゃうわ」

たいていの人間はキャップなどは持たない。目覚めると夢世界からいなくなり、眠ると現れる。

シンゲン、女、私と、何でキャップを持つことになったのだろうか？

「だって、わたしこの世界が好きなの。自由だし、好き勝手にできるし。ただ逃げつづけなくちゃいけないのが難点ね。でもそれでもいいわ。シンゲンも同じ考えよ」シンゲンは表情をあらわさない。

「あなたは今は逃げつづけるけど、きっとこの世界にいること、いつづけることを願っていたのよ」

「そんなことはないさ。できることなら脱出したいよ」

「そこよ、そこなの、あなたが黄色いキャップを持つ理由は！なにかあると逃げ出したくなる、私も同じ。でも、私とあなたの違いは私はここにいることをきめたこと、そしてあなたはさらに逃げること、そんなことをしていたらどんな場所にもあなたの居場所はなくなるわ」

「現実に戻りたい」

「分からない人ね。無意識に現実から遠ざかっていたのよ、シンゲンもそう。現実の苦痛から逃れたかったの。もし現実に戻ればやはりオレはここの方がいいっていうことになるってのはちょっとだらしない？男として」

声が近づいてきた。私を探す取締局の連中らしい。英語塾の前の狭い通りはカーブを描いていて、その先に数名の男たちがいた。

女は私の肩を叩いて、  
「スリル満点じゃん？」と笑った。わたしは急いでキャップを被り、地面に潜った。

村長の家に私が現れると、村長の足を枕にして孫が指しゃぶりをして眠っていた。村長はヨウコが帰ってこないというので、行方がわからなくなってしまいました、と伝えた。村長は納得できないと、不機嫌になった。

「ヨウコは実によく私と話をしてくれた。孫にもよくしてくれた。そのヨウコがいなくなったわけを知りたい。もうこの家には戻ってこなくなるのだろうか。」

「ええ、団地を載せた舟があり、その団地の一室にいるらしいのですが、舟はもう出ていきました。」

「取締局の連中か？ヨウコをさらったのは」

「ちがいます」

「せめてもの救いと言いたいが、私は諦めない。ヨウコをこの家に戻さなくては。絶対にもどす！」

ドアがノックされた。村長が対応しているが、どうも追ってきたようだったので、急いで地面に潜った。

もう夜だった。

空中警察が男が出没しそうな個所を隈なく捜していった。私はその時日露側溝に出ていた。上空のサーチライトがもうすでに側溝の上をスキャンしていた。目と鼻だけを出して泳ぎつづけ、トンネルを抜けると、女が側溝わきの土手に姿をあらわし、案内しだした。

「そこ、ダメ、そうそうそこ、そこから這い上がって」

シンゲンが心配した顔つきで女の肩口から覗き込んだ。

泥だらけの私を土手に生えている草で拭くと、女はこっちに来てと言って、避難場所へと私を連れて行った。

そこは夜だというのに明かりが強かった。それも裸電球を数多く垂らしている和綴じ本の店だった。

「オヤジ、オヤジ」と女が怒鳴る。

店主が奥から出てきた。

「なんだ？『谷岡の化学』は入荷待ちといっただろうが」迷惑そうに言った。

その店は本を積みかさね、太い板の本棚が天井まで届いていた。その本棚の下は台になっていて、人気のある本がやはり積み重なっていた。店主の話によると、この店は受験参考書の店で大学生がよく通って、昼頃には混みあうそうだ。

「なんで受験生は来ないのですか？」と私が尋ねた。

店主は自慢気に

「うちの本は絶版とか初版しか扱わないからたいへん高額で、貧乏な受験生は来ないんだ。教授なんかもよく来るよ。」

シンゲンが小難しい顔つきで、

「宗教関係の本とかは？」

「いやあ、売らないよ、ジャンルが違うんだ。うちの一つのジャンルしか扱わないんだ。宗教書ならこの先の店が専門だ」

女が少しイライラして店主にシェルターを使いたいと言った。

「谷岡の化学って、盛んに言っていたら、学生さんかと思ったよ。シェルターか...いいよ。」

シンゲンと女は店主のあとをついていくと、居間を通り、台所の入り口で待つように言われた。壁沿いに上に伸びる階段があり、上からは光が差し込んでいる。木の階段で、階段下にはたくさんの本が積み上げられており、紐で結わかれていた。数冊持ち上げては傍らに積み上げている。時間がかかるため、三人で手伝った。

「もう、上がれるだろう」と主人が言うと、片足を何とか隙間に入れ、跨いで階段を上ることができた。そして三人は階段を上っていった。

階段の上に行くと、アパートの二階の外廊下になっていて、明るい光はそこから見える青空の光だった。手すりの向こうにはかなり離れて同じくアパートが向き合って建っていた。アパートとアパートの間には干上がった運河のような浜辺が眼下に見え、ヒトデやフジツボ、フナムシが岩に張り付いていた。砂利が多く、女の話だと、その浜辺には満潮時、川のようにして海が入り込み、魚が釣れるそうだ。

シンゲンが女の釣った魚を食べようとしなくて、海草ばかり食べると文句を言った。

「いっちょまえの坊主気取りしているのよ」

「お坊さんは生臭ものは口にしないものだよ」私は言った。

「この部屋よ。シンゲンと私が使っているの。」

「ここがシェルターなのかい？」

「ここは警察も取締局も来ないの」

「どうして？」

「だって、シェルターだからよ。それに、私、なんでとか、どうしてって言われるの好きじゃないの。とても疲れちゃう。それを知ってなんなのって言いたい。うーん、たぶんね、このアパートは誰かの夢の一部なのよ。連中が検閲しても問題のない夢の一部なんだろうね。納得した？」

「ああ、夢の構造が分からない」

「大丈夫よ、私たちも知らないから」

シンゲンと女は夫婦みたいだ。

シンゲンはベージュの大きなソファに一人で座り、女が飲み物をまえのテーブルに置く。女と私は床に座って、シンゲンのくつろぎ方が亭主といった感じなので訊いてみた。

「シンゲンと所帯をもっているみたいだね」

「違うわ、成り行き上、こうなったの」

消防小屋でのシンゲンと女の立場が逆になったような妙な関係だった。私が彼らと接しなくなった間に何があったのかさっぱり分からないし、くどくど訊くのを女は嫌がることだろう。そのくらいにシンゲンと女の立場は変わっていた。

シンゲンが溜息か苛立ちの鼻息か分からない息を吐くとリモコンを放った。リモコンがテーブルの上で音を立てた。

「つまらないテレビだ。映りがひどい」

「潮風でアンテナが錆びてしまったんだわ」

「じゃ、電気屋に直させろよ」

「分かったわ」女はそう言って、私に向かって顔をしかめた。

シンゲンが足をソファの上で伸ばし、テーブルの上に乗せたり、靴下を放り投げたりしている態度を見ると、ずいぶんと変わったなと思った。あの気弱で、母親が支配していたシンゲンがすっかり変わってしまっていた。女は女でシンゲンに従っている。不満でないのだろうか。

それにしても静かなところだ。唯一外の音というのが浜辺に海水が満潮の時に侵入してくる時の音だけで、他の部屋からは全く音がせず、このアパートには誰も住んでいないかのようだった。

夜になって波音がしていると、女が

「侵食しているのね」

「何が？」

「海よ」

「浸水でしょ、侵食じゃなくて」

「いいえ、侵食よ」

なぜか、女は侵食という言葉に拘った。さらに女は

「シンゲンには困っているのよ。ご飯の支度が遅いと殴られるし、部屋の掃除が行き届かないと大きな声で怒鳴るの。それにせっかく苦労して作った料理が口に合わないと、台所に捨てに行くし、一回こっちも怒鳴ったら、あんまり頭にきてね、口を利かなくなっただし、物にあたるの、だから、こっちが折れるしかないでしょ」

「亭主関白なんだ」

「冗談よしてよ、同居しているだけなのよ、夫婦じゃないわ」

「モグラの兵隊もたいへんだ、出て行くわけにも行かないしね、狙われるからね」

「セックスもレイプに近いわ、以前インフルエンザになった時も、乱暴されたの、私」

「ひどいね」

「なぐさめてよ」

私が女の手をきつく握った。女は私の胸に顔を押し当てくすぐった。シンゲンがいないので、女に訊くと、

「坊主だからお勤めしてんのよ、しばらく帰ってこないわ、それに夫婦じゃないんだから、わたし平気」

私は女の肩を掴んだ。女が痛がるので、力を緩めた。

「わたしこう見えても、か弱いだよ」

「ごめんね」

行為を済ませると、隣の部屋からテレビの大きな音量がしたため、シンゲンがお勤めを終えたのだろうと思い、私たちは急いで服を着た。

「なに見てんだろうね」

「牧師の説教よ」

「仏教徒でしょ？」

「関係ないみたいよ」

「ユキさんは見つかったのかしら？」

「いや、見失ったよ、団地を載せた小船に揺られて、消えた。」

「ジャンクは？」

「死んようだよ、小林に殺されたらしい。」

女が立てひざをして、ペディキュアの様子を見ていた。ショーツから陰毛がはみ出していた。

「小林について知っていることはないのかい？」

「インチキ、ペテン師、詐欺師、嫌な男としか頭にないわ」

隣の部屋からシンゲンが女を呼んだ。

「下手くそなのよ、だからわたしわざと声を出してあげるの」

何か不思議な感じがした。怒りと寂しさが混じった感覚があるのだが、二人がどうしても夫婦に見えた。

しばらくして襖を引いて女が出てきた。女はお風呂に行く、と言って姿を消した。隣の部屋を見ると、大きなベッドの上で全裸のシンゲンが大の字になって弛緩していた。シンゲンを見ていると、毛布を引き寄せ、頭から被り、鼾をかきはじめた。何もかもが退屈な部屋であった。時間が怠けているような感じだった。風呂場からは桶を湯船につける音が響いていたし、シンゲンは寝入っていた。

女が風呂から出てきて、夕食は何がいい？と訊いてきたので、

「この辺に店なんかあるの？」というと

「借りてくるのよ、服が隣にあるから、着替えるね。」とあって、襖を閉じた。

30分の着替えは長いと思う。食卓を囲んで、魚とご飯とお新香をつまんで食べた。

「シンゲンは一汁一菜って言うけど、彼だけのメニューって、はっきり言って面倒よ」

シンゲンは隣の部屋からけだるそうに出てきた。そして、食卓を囲むのかと思いきや、トイレにでも行くのだろうか、別のふすまを開け、（それは服が置いてある部屋だった）入っていった。そして、私は、女に何があるのかを聞くが「トイレよ」とか「風呂場」など言うのだが、核心をついているのだろうか、女は動揺して、言葉に切れが悪いところがあった。そのため、食事を止め、女を引っ張り、開けるように促した。すると、女はふすまを開けた。そこは服が山になって、天井に届いていた。なるほど服をためておく部屋であることは確かなのだが、何か不自然であり、それは、シンゲンが姿を消したことから問題のある部屋であることは明らかだった。

「その先はなんなんだ？」

「ここは、別に、押し入れよ」

「おかしい、絶対おかしい」

私がさらに奥の襖を開けようとする、シンゲンと女は必死に抵抗する。どうにか女を押し分け、襖を開けると、そこは階段が続いていた。裸電球が頼りなげに数個あり、私は上っていった。

「いっちゃだめ、ダメ！」女が叫ぶ。

私は階段を上がっていくと、そこは小林の部屋に続く階段であった。遠くから女のうめき声が聞こえてきた。シンゲンが下りてきた。

「おまえたちは！」私は言った。

「仕方ないでしょ、逆らうわけにはいかないのよ」

私はキャップを持って、シンゲンらの部屋の床に潜った。

村長の馬小屋に出た。

村長が馬に浣腸をしていた。シリンジを持った村長が不思議な顔をした。

「あ、ヨウコは見つかったのか？」

「だから、行方不明になっているのです。それより、裏切り者がいます。」

「誰がだ？」

「モグラの兵隊について訊きたいのですが、知っていますか」

「それは慎重な話だよ」と村長は言い、長い話を始めた。

村長が言うモグラの兵隊のいきさつは次のようなものであった。

「村祭りが昔あり、ある男がツチノコを採りに行こうと話を小さな女の子に言ったが、女の子はツチノコを知らない、と言った。男はこんな物だよ、と行って下腹部を露出させた。

その一件があって、村では警戒を شدしたんだ、変質者がいるって言うことでね。その女の子はショックではあったが、イタズラはされなかったからよかった。しかし、その変質者は捕まらなかった。

しばらくして、村の青年団の夜回りがいい加減になりかけた時に、ある事件があった。夜回りがいい加減なのは、村に一人の女がいて、それに彼らが夢中になって、夜回りのたびにその女の家に上がるようになったからだ。だいたい想像はつくと思う。

小学生の女の子が、森の茂みで泣いていたのだ。私の前の村長が、偶然その子を発見して、警察に届けた。すると、その女の子が変なものを見せたと言う。そして、それがツチノコの一件とぴったり合うんでね、警察は変質者探しを始めた。そこで登場するのが、シケモクという売春婦の子供だった。彼は再教育されたが、ツチノコの一件とは全く関係のないものであったんだが、村が警戒していたので放置した。とうとうシケモクはダメになって村に帰り、しばらくして死んだ。

ところが治安取締局が動き出した。というのも、シケモクが起こした事件でないことが分かったためだ。

そして、ツチノコ事件はそれ以降たびたび起こった。最終的にはかなりの数の女の子がイタズラされた。しかし、とうとう犯人が下腹部を切断された状態で発見された。その犯人の言うには、自分のペニスを切り取った奴は男で、地下に潜った、と言う。警察は信用しなかったが、たびたび地下に潜った話しが噂で広がった。再び治安取締局が動き出した。

不思議だと思うが、連中は治安を乱すものはどんなものであれ、捕まえ、再教育をする。治安を乱すものというのは、書籍、噂の源、人物、犯罪者、思想、全てだ。とにかく平穩を彼らは至上命題にして、捕まえ、再教育をする。そんな集団なのだ。もちろんモグラの兵隊として事件化するころには、噂は事実が変わった。実際数名の兵士を捕まえたが、全て、逃げられてしまった。治安取締局にすると、兵士は治安を乱すものとして登録され、どのくらいの数か、どんな活動内容か、どんな能力をもつのか、そう言った集団の特性と言うか性質をかなり探るのだが、全く分からなかった。ただ、この世界の根幹を揺るがすまでには行かないが、危険であることは確かであった。それは、取締局と警察の連携で機能しているこの世界の秩序維持をモグラの兵隊が割り込むことはどだい彼らにとっては脅威だろう。そもそも彼らにとってモグラの兵隊のすることは自分たちの領分に侵入することだからだ。

取締局が動くころには自治の働きはなくなってしまった。そして、取締局と警察の力が増して、モグラの兵隊への期待が高まるはずだった。ところが、怠惰だ、流されるの任せる私たちの心が彼らを追い詰めることになった。私たちは支配されると抵抗の力を失うのだ。抵抗の力を失っ

た時には、期待を希望を抱く。その希望であったモグラの兵隊を私たちは取締局に売ることになった。長い物にまかれろだ。支配され、抵抗を失った心は、支配者側の思考に依存するものだ。これは従う者の心の弱さなんだがね」

「しかし妙です。モグラがある意味治安を維持していますよ。」

「たしかに、だが、警察が2つあるのはおかしいだろうが。権力はひとつでないともたらんよ。ある意味奴らはモグラを追い詰めることで、刀狩をしているんだよ。やつらは自分たちの領分や使命に割り込んでくることを決して許さないだろう」

そう村長は長い話をしたあと、この馬は便秘でね、といって馬の後ろから身を引いた。馬の尻から汚物が噴出した。

「今、きみは裏切り者がいる、と言ったね、誰に寝返ったんだ？」

「小林です」

「小林って、あの博愛協会のか？」

「そうです」

「なら、ヨウコも奴に監禁されているに違いない」

「なぜ、そう思うのです、舟で流れていったのですよ」

「いや、監禁されているのだよ」

「確証がないでしょう？」

「あのな、ノンノン様に聞いてみるとしよう、言い争っているうちに小林に手籠めにされるんだ」

村長は手を消毒し、ノンノン様のところに出かけることになった。

ノンノン様は英語塾の部屋にいても、村長は違うと言う。そして、この頑迷な村長のあとをついていくことにした。村長は、その時不思議なことを言った。自分も昔はモグラの兵隊だったと言うのだ。そして、キャップ、しわくちゃのキャップを取り出した。「昔は、工事現場のようなヘルメットだったんだ。初期の頃だ。私がモグラになったのは、ずいぶんと昔だよ、娘夫婦が子供を放り出して、協会の集会に夢中になってしまった。それから辞めたのだ、あの孫は私の娘の子なんだよ、娘の代わりがヨウコだったんだよ」

村長は先代の村長が小林の博愛協会員になっていたことも話した。

「協会員というのは独特でね、まず、子供のころから洗脳されるみたいなもんだよ、小さなころから集会に出る。そして学ぶ。何を学ぶかしらんがね、この世の秩序を維持することに専念しだす。私のあった協会員はまともな奴はいなかった。彼らには思いやりとか慈悲とか罪悪感とか人情などない、勢力を拡大することこそを大切にする。それこそが正義だと言い出してね、わたしには奴らの言う正義と言うのが全く分からない。小林の説法を聞いてはそれを暗誦する。彼らの部屋には小林の書籍であふれかえる。全巻そろえて満足している。彼らの頭脳は小林で支配され、将来は治安取締の連中になるか、警察に入ることになる。そして、市井にいる協会員は密告をすることで小林に忠誠を誓ったこととされる。彼らは互いを助け合う。家の建て直し、借金、就学、就職、そして結婚。全て、協会員の中での近親相姦なんだよ。協会員以外だと分かれば、暴行、殺害など平気でやる。でも、足はつかない。そうなったら、どうなる。意気消沈だよ。やつらに抵抗しようがないだろ。」

村長の話を知っていると、高台に来ていた。赤い三角の屋根をした住宅街を抜け、狭い路地を抜けると、視界が開けた。遠くに夕日が沈みかけていた。村長という道は細く、その左側は急な崖になっていて、落ちないように頼りない錆びつき、曲がっている、弱々しい手摺が伸びていた

。その崖下は歩道が何本も走っていて、いったい何のためにそんなに遊歩道を設置したのか分からなかった。それにその遊歩道の上には電線が何本も渡されていて、まるで崖から落ちると感電死するようにつくりだった。

その崖の上を歩いていくと、道の行き止まりに、一軒の日本家屋のドアが岩にのめりこむようにしてあった。菱形の曇りガラスがあるドアで、村長がノックし、ドアを開けると、ノンノン様が布団の中にいて、隣にちゃぶ台があり、食事が用意され、その上には蠅除けがかぶせてあった。窓の外には田圃が広がり、稲が豊富に伸び、豊作を喜ぶかのように青空の下で生育していた。「おい、ノンノン様、起きてくれ、相談だよ、困ったことになった」

「また長話なら嫌だよ」

そう言って、ノンノン様は布団から出て、村長と私に向き直った。村長はヨウコの居場所を教えてくれ、と言った。

「博愛協会の手籠めにされてはいないさ、流されたんだよ、川に」

「どこに行くと思う？」

「さあね、小林は最近モグラを一掃する計画をしているから、見つけ出そうとするだろう。協会員が発見したら、ヨウコさんは小林の下に連れて行かれる。そして、あんた、お前だよ、お前を合法的に連行し、モグラのありかを聞き出す。」

「私はキャップをもっているだけで、知りませんよ」

「小林は手下をいつか世に放つ。お前は人を殺めたことになるので、捕まえるのは簡単だ、空中警察、治安取締局、協会員の密告、ありとあらゆる手段で、お前は捕まる。村長、あんたもだ。」

村長が「奴を使ったらどうだろうか？同じ色仕掛けなら」

「悪くないが、小林は気が狂っている。失敗は目に見えているよ」

「なにもしないでいるよりいいじゃないかね」

「やってみな、老兵」

「口が相変わらず悪いんだ」

ノンノン様が再び布団に入ると、村長と私は再び村長の家に戻る事となった。村長が孫がそろそろ起きるころだし、家を留守にするのも不安だと言った。

「奴ってだれです？」私は村長に尋ねた。

「ははは、お前も知っているあの男女だよ」

「あの、心理カウンセラーですか？」

「ああ、そうだよ」

孫の寝室に入った村長は不貞腐れてあとをついてくる孫をなだめていた。というのも、村長は「機関車トーマス」を知らなかったからだ。

「知っているかい、機関車トーマスとかいう玩具を」

「ええ、顔をつけた機関車ですよ」

「お前、そんな怖いものが欲しいのか？」

「怖くないです、子供に人気があるのです」

村長は機関車トーマスを買いに行くので、そのあとに策を練ろうと言った。

村長とオレンジ色のダウンを着た孫が玩具店をめざして歩いていると、孫が「じじ、空見て」といった。空中警察に追われている一人の男が浮上ジャケットでからかうように旋回していた。「勇ましいね」村長は懐かしむように微笑んだ。

飛行する男は速度を上げ、あっという間に空中警察をまいてしまった。飛行機雲がフェンシングの軌跡のように後に残った。

間抜けな空中警察が落胆しているのが地上からも分かった。

機関車トーマスを買ってもらった孫を連れ、村長が帰ってきた。それから、私と村長は固定式のビルに出かけた。

「私は思うんだがね、このチンパンジーは何か意味があるのだろうか」

「知りません、愛嬌でしょう」

「女の愛嬌なら可愛いが、男がお茶目と言うのは私はどうも好かん」

シンバルの音とともに、カウンセラーが現れた。

「よ、しばらくじゃないか」

「ああ、村長ではないですか」

「人がいなくなったんだ、そして、こいつも狙われている、頼みがあるんだがね、小林を誘惑してほしいのだ」

「誘惑ですか？」

「ああ、ま、奴を君の色仕掛けでとろとろにして欲しいのだ」

「そんな無理ですよ」

「そういいなさんな、うまくいくよ、君の容貌なら、奴も油断するはずだ」

そして、笑いながら、手をひらひらさせた。

「やってみます。」

固定式ビルを出て、村長と私は話をした。

「ああ簡単に引き受けるものですかね。何ですか、あの合図は。」

「あれは、餌だ。大枚の代わりに好きなだけ、色漁りができるという保証の合図なんだよ。あの男女はスケベなんだよ」

「スケベっていうのは分かりませんが、危険じゃないんですか」

「ははは、人間っていうのは異性にたいへん惹きつけられるんだ。あんただって、ヨウコに惚れただろ？」

「いきさつがありますからね」

「いや、そうじゃない、男と女というのはそういうものなんだよ、ところが奴は両性を知っている、男の発情と女の発情を知っている、だから小林がホモセクシャルならそう対処するだろうし、レズビアンならそう、ヘテロならそう、そういうことだよ」

「どう接触させるのですか？」

「集会があるんだ。その時を狙う」

町の看板を見ると、確かに「打ち上げ花火をします」と書かれ、日時が示されている。そして、奇怪な写真が掲載されていた。それは皆同じ服を着た多くの人間が、足を右に流してそろえて、椅子にきちんと腰掛ける写真と、マイクを持つ男の後姿で、片手を大きく上げ、それは演説を聞き入る観衆の写真である。観衆は背筋を伸ばし、皆同じ顔かたちをしていた。

「これですか？」

「ああ、この不浄集団だ」そう言って、村長は写真をビリッと千切り、つばきを吐きつけた。「忌々しい集団だ。えーっと場所と時間を癪だが、確認しないと」なんて、村長は千切ったポスター

をもって、家に私と帰ろうとした。その時、ライダースジャケットを着た男が数名出てきた。

「何をしている、そのポスターを切ることは許されていない」

「誰かが切ったのだ、私は知らん」

「ちょっと来てくれ」

男が村長の脇を抱えた。暴れる村長のみぞおちに拳を埋めると、村長はいっそう暴れた。しかし、男たちは冷静に村長に接した。

「私は知らん」

彼らの脳信号で、空中警察を呼んだ。少しして、浮上ジャケットを着た空中警察が現れた。

村長が、

「被れ！」と言った。

私と村長はキャップを被った。そして、村長が地面に飛び込んだ。私は手間取って飛び込みそこなった。

「君、そう君！来なさい！」とあって、私の腕を掴もうとした。急いで、地面に飛び込んだ。

村長と私は馬小屋に出た。

「危ないところだ」

「村長、ポスターを破くからですよ」

「知らん、あのポスターを見るたびにあの観衆の中に娘がいると思うと許せんのだ」

「それでなくても私は狙われているんですから」

「それでは小林先生の御講和です、静粛に願います」

小林は手を上げて壇上に駆け上がった。

人々は静かに背筋を伸ばして壇上を見た。小林は満足したように笑い、話し始めた。原稿を見るため趣味の悪いメガネをかけた。教員の時に買ったものだ。

「えー、ご静聴ありがとうございます。教員を長くやっているといろんなことがあります」ととうとうとだらしなく教員時代の思い出話をしだした。

集会が終わり、小林の「人を育てる12」という書籍にサインをしてもらうため、サイン会が開かれた。小林は有頂天であった。毎日有頂天だったので、頭がいっそう変になっていった。そのため、疲労を感知できず、サイン会の途中で倒れた。辺りが騒がしくなり、その時心理カウンセラーが人ごみを掻き分け、脈を図った。係員が「お医者様ですか」と聞いたので、心理カウンセラーは肯いた。すると、人ごみが皆一緒に安心しほほえましい顔と言葉を発したが、まるで思考が同じできみが悪かった。話す言葉も同じであり、表情も一様であったため、カウンセラーは少し不安になった。

「聞こえますか」

小林が協会本部の診療室で目が覚めた。

「かなりお疲れだったようで」

「小林先生伝言です」

メモを片手に小林は心理カウンセラーに微笑んだ。

「ああ、私は愉快地に元気になった。実に楽しみだ。」

「何がですか」

「私の生きがいは教育だ。それができることが、このメモに証明されている。」と言って、暗号の書かれているメモを見せた。

「なんでしょうか」

「あなたがモグラに協力をしていることを証明する暗号だ。おい、コイツを私の部屋に連れていけ！」

数名がカウンセラーを抑え込んだ。

小林は黒い脂ぎった髪をかきあげ、整え、自分は拷問部屋へ急いだ。

小林は金属器具を持って近づいてきた。心理カウンセラーの額に汗が浮かんだ。

「以前、といっても、私が教職についていたころだ、公然と私を非難した女の子がいた。私は憎くて憎くて仕方がなかった。それは表面上では笑っていたよ。でも、憎しみは心を傷つけたんだよ、男の生徒にも傷つけられた。だから、おまえのような正体が不明な人間を見ると、憎くて憎くて仕方がないんだ」そう言って、小林は心理カウンセラーのペニスを切り落とそうとした。

「どっちを残したいかな」

心理カウンセラーはおびえて声にならなかった。

「教職員は性欲を抑制しなくてはならないのだ。性欲を焼きつかせなくてはならないのだ。どうする？」

金属器具が近づいた。心理カウンセラーは暴れた。

「何日経っても連絡がないんだ」村長は言った。

ノンノン様は危険だといった。「正体が分かってしまったよ。」

「小林はヘテロでもホモセクシャルでもない、彼は痛めつけることで興奮するのだよ」

「お前は拷問部屋にいったではないか。」

「ええ、でも偶然で、」

「何とかならないのか！」

そこで、私はキャップを被るのだが、構造が分からないため、なかなか拷問部屋に行かない。

ノンノン様は、私へむかって彼女に対して偏見があるから、望んだところにいかないんだよ、と言った。

刃物状の器具の隣に、熱せられた赤い棒状の器具が置かれていた。小林はその棒状の器具を新聞紙の上で回転させると焦げた新聞紙が宙に舞った。

小林は、萎縮したカウンセラーのペニスを持ち上げ、器具をあてがった。

天井が割れた。人が飛び降りて、ロッカーの陰に隠れた。

小林の脳の嗜虐的な興奮が消えたため、苛立ちが始まった。そして、受話器を探した。

ロッカーが倒れた。小林はロッカーを蹴り、侵入者を探そうとした。すると、黒いコートを着た男が急に飛び上がった。回転して小林に水蒸気を吹きかけた。高熱の水蒸気だったので、小林の顔が焼けた。そして、カウンセラーを抱えて天井から飛び去った。

苦しんでいる小林を二人が笑った。一人は教壇上の女。彼女は緊縛された状態で大きく笑った。もう一人は飛び去った黒いコートの男で、彼は耳に響く高笑いをした。

カウンセラーは黒いコートの男に抱えられ、飛んでいた。空は夜になったり、嵐になったりした。変化の著しい空を背景に、拷問部屋から解放されたカウンセラーは飛びつづける男の胸に顔を埋めた。男は無言であった。一言もしゃべらなかつた。そして、村長の家までカウンセラーを送ると、再び飛び去った。

空には浮上バイクが家路を急いでいて、自分を助けた男はその列にまぎれこみ、目で追っているうちに見失ってしまった。

小林は火傷になった顔面を熊のプーさんがプリントされた手鏡で見ている。

「これはいかん、たいへんな火傷だ、これでは整形が必要だ。」

火傷を見るたびに小林の苛立ちは高まり、手鏡を割った。そして受話器を取り、取締局に連絡をした。

取締局側からの情報によると、火傷を負わしたのは正体は分からないが、浮上ジャケットを着た男で、当局は標的にしており、捕まえようとしているが、なかなか捕まらないで困っているとのことであった。そして、女のほうは両性具有者で固定式ビルでカウンセリングを行っている者だと、分かった。さらに村長と若い男が計画したもので、これは取締局としては迂闊ではあったが、最善を尽くす。おそらくその村長のところにいるのが、若い男だろう、その若い男は殺人容疑でいずれは捕まえることになるが、その時には再教育をお願いすることになるだろうと伝えた。いずれにせよ、再教育の手順は取締局が整え、手渡すので、先生としては火傷の手当てをして欲しい、そんなに時間のかかるものではないので、ご安心願いたいと、言った。最後に先生としてはどんと構えていて欲しい、実績のある方なので、信頼しているし、先生の再教育は教育効果をもっており、取締局としては先生以外の方を知らず、もし知っていたとしても先生以上の矯正はできないと、局内では評価しているとお世辞を言った。

これだけの報告を知った小林は安泰であり、今必要なのは整形であった。

整形外科の順番は小林の権威を傷つけた。何度受付にいる包帯だらけの女に言っても、順番ですから、とのことで話にならなかった。廊下のリノリウムの床が剥げて、ゴキブリが這っていた。小林は待合室を睨んだ。すると、皆一様に大きなプラスチックのマスクをしていた。マイクロフォンで小林さん、と呼ばれると苛立ちはいっそう高まった。彼は先生と呼ばれないと機嫌が悪くなるのであった。

診察室には医師が右上を向いて微笑む写真が掲げてあり、その周りには整形実績を示す患者の笑顔の写真が囲んでいた。

医師は始終にこやかで、ボールペンを走らせた。

「火傷の具合を見ましょう」といって、医師は診察を始めた。

「これなら整形でなく火傷専門の外科に行くのがいいでしょう」と医師は言った。すると小林は、懐から写真を取り出した。その写真は妻の肩に手を回し、にやけていた。

「こういう風にして欲しい」

「と言いますと、元通りの顔にしたいということですか」

「ええ、そうですよ」

「それは無理です、火傷のレベルが高いので、皮下組織から筋肉まで焼けています。よく整形に失敗した人がいるでしょ、あれと同じです。方針としては、一回火傷を治療して、臀部の脂肪を埋め込むなどの方法があるでしょうが、どうしても引きつりますね」

「そこを何とか、できないかね」

小林がここまで顔に拘るのは、自分の顔が理知的で、メガネをかけることで、再教育の際に対象者が恐怖で目を見張るのが小林にとってはこの上ない心地よさなのであったからだ。つまり、自分の顔に威厳と風格があり、効果を持っていると思い込んでいたのだった。その真意がどうもこの医者には通じないらしく、小林はすっかり自信をなくして病院を出た。

事実小林の顔は粘液が出始め、湿り気を帯び、感染症を引き起こす手前であった。

火傷専門の外科に向った。一週間入院し、退院をした。

小林は嫌がらせのようにもとの整形外科に行って、同じことを言って医師を困らせた。

「だから。無理なんですよ。火傷の治療というのはできていますが、元通りにならないと、あなた怒るでしょ。だから、当医院では余分な期待は患者さんに抱かせないようにしているんです。こうなりますよ、と誇大広告を出す医師がいますが、うちはしないんです。でも唇の繋がりとか、鼻の位置を戻すなどはできるでしょうが、まず、火傷前の顔には戻らないと覚悟してください。繰り返します。元には戻りません。それに何回来ているんです？十分方針が伝わっているはずですよ。もし不服でしたら、病院を代えることですね」

そこで、プラスチック整形病院を教えてもらった小林はそこに行った。すると、長い髪の女の医師が、

「火傷ね、大丈夫よ。方針、言うね。顔にお面を入れて、人口の皮膚を貼り付けるわけ、分かる？」

「わかるが、なんて口のききかただ。きみは医師なのに教育を受けていないようだ」

「なに？先生なの？」

「教師だ」

「あたし教授は尊敬してるけど、それ以下はダメだと思ってるの、分かる？」

「君も後悔すると思うよ、私を怒らせると」

「なに？脅迫？何のためかしら、わたしわかんない。それより、治す気があるの？治す気がないの？」

「ずいぶんな扱いだ、治してもらおうよ」

「いいよ。いちんちで終わるから。」

何とか整形で保った小林であったが、表情はなくなり、能面のようにになっていた。鏡を見ると、これが限界だと悟りはしたものの、原因を頭の中で考えているうちにものすごい怒りが湧いた。

取締局は取締局で若い男を捜すことに追われていた。ジャンクは始末し終えたが、もう一人いるためどうしても捕まえなくてはならなかった。それは夢の世界での犯罪であり、夢を破壊するモグラの行為と匹敵するくらいの悪事であるからだ。

取締局は屋上に細いアンテナが鼠の髭のようにあちらこちらに伸び、その横を捕獲したモグラのキャップを世界の国旗を並べた万博のようにして吊るしてあった。これは取締局の誇りであり、実績であった。建物には垂れ幕があって、「世界の敵、モグラの一扫強化中」や「教えあう、情報

共有、周りの協力」と韻を踏んだものもあった。

建物の窓には目玉のイラストが印刷されたシールが貼られ、監視していることをアピールしていた。建物の内部はがらんとした広い廊下を挟んで個室が更衣室のようにしてたくさんあり、一番はずれには処理室と書かれた小屋があって、ここが小林の拷問室と繋がっていた。職員は皆ライダースジャケットにエンジニアブーツを履きぼろぼろのデニムを穿いていた。滅多に廊下には現れず、個室で取調べをし、連絡は脳信号を使った、合同会議でもそうであった。脳信号は幻聴のように頭の中に響き、会話が可能であった。彼らは脳を改造されており、眠らない。そして無表情であった。小林の顔のほうに表情があるくらいであったが、彼も火傷で仮面のようにってしまった。結局モグラの敵は顔に表情がなかった。何名かのモグラの兵隊が、取締局に捕獲され、この個室につれてこられた。最初のころはキャップの存在に取締局は気づかれなかったため、モグラはいとも簡単に地下に潜ることができたが、一人のモグラがキャップを取り上げられ、潜れないことに気づいた取締局は捕まえたモグラからまずキャップを取り上げることが有効であることが発覚した。そのためモグラの犠牲が増えた。小林の再教育でモグラの兵隊はどんどん死滅していった。再教育は生きて帰ることがある場合と、小林の裁量で決まるため、熱を入れすぎた場合は死亡してしまう。そんなものであった。それでも取締局は無頓着であった。再び世界に戻るかどうかは関心がなく、彼らの職務は小林に送り届けるだけである。それが済んでしまえばどうなろうと取締局には関係のないことであった。小林が火傷を負ったことは連絡が入ったが、そんなに職務と再教育過程に影響はないと判断された。

ところが、小林にとっては自分の顔が変わったことは、取締局が無関心で済ますわけにはいかなかった。小林は久々に街頭を歩いていたところ協会員に声をかけられた。この協会員は熱心であるが人格に欠如があって、取締局に何度か連行されていたが、小林の再教育の過程では小林の裁量で釈放されていた。協会員が取締局に逮捕されることはまずありえないくらいであった。ところがこの協会員は逮捕された。それほど頭の悪い協会員であった。

彼は揚げ物屋を営んでおり、食堂を開いていた。その食堂でモグラの落としたキャップを被り地下に潜り、逮捕されたのであった。胃に悪い食堂として人々に知れ渡っていた。

「先生じゃないですか、ひょっとして？」食堂の前でズボンに手を入れ、動かしていた。この男が声をかけた。

「また、そんな馬鹿なことをしているのか、お前は！」と小林はうんざりしていった。小林が小林なら、その手の人間しか小林の周りにやってこない。それを小林は気づかないのであった。

そこで、小林は取締局からの連絡がなかなか来ないため、業を煮やして協会員によって、村長と若い男を捕まえることを思いついた。

「ま、お前でかまわない、頼みがあるのだ。」

「なんでしょう、うち、店を開けてもいいですよ、先生にはお世話になったので」

「そうだね、そこでなんだがね、男を捜してもらいたいんだ。お前一人では無理があるだろう、知り合いはいないのか」

「いますよ、病院長の息子なんです。彼は金があって、遊んでばかりいるので、ひまです。彼にしましょう。」

「他にいないか？」

「えーと、それから大学生を使いましょう。幼馴染です」

「頼りなさそうだ」

「そんなことはありません、皆おれの言うことならすぐ聞きますよ、それに協会員ですから」  
「簡単な面接だ、そのなんだ、病院長の息子にあわせろ」

「ええ、いいですよ」

小林と油屋は病院長の息子に会いに行った。彼の部屋に通された小林はイライラし始めた。なんと言うことはない、医学書からコピーをとった生殖器の写真で部屋は埋め尽くされていた。盛んにジャムを舂め、煙草を吹かし、部屋はうす雲っていた。

「小林先生だ、協会の」と油屋が紹介した。

「ああ、協会長ですね」

「そうだ」

「何だね、きみの部屋は！教育上好ましくないものばかりだ」

「まさか先生が家庭訪問するとは思っていなかったんで、来るなら掃除しときましたよ」

「そうじゃない」

「え、部屋が汚れているからじゃないんですか？」

「この写真だ、きみは何を考えているんだ」

「これは…」と息子が言うと、小声で油屋に文句を言っていた。

「ま、若いから仕方ないが、目を瞑ろう。次に来るときは写真を剥がしておきなさい」

「おい、次の大学生を紹介しろ」

続けて、大学生の家に行った。

ここもひどい状態であった。安アパートの2階に居を構えた大学生は完全に本に埋もれていた。

小林と油屋がその部屋に上がりこむと、大学生は

「忍び足でお願いします」

「なぜだ？」と小林が言うと、

「床が抜けるんですよ、もうじき」

「なら、処分すればいい」

「処分ですって！」

「こんなに書物を持って、本屋さんでも開くのだろうか」

「愛好家なんです」と、大学生が言うと、「この本は初版なんですよ」といって、一冊の書物を出した。その書物には芸能リポーターが表紙を飾り、ヨツと手をあげていた。二束三文にもならないゴシップ集であった。

「これをきみは読んでいるのか？」と小林がいった。

「ええ、その他にもありますよ、これは子役の成長日記です」といって、子役が生意気そうな顔をして飾る表紙を女の頭を撫でるようにして埃を落とし、裏表紙を見せた。

「ええ、ここにサインがあるでしょ、これ、サイン会で握手したんです。歌すごうまいですよ」

小林は気が滅入ってきた。

「とりあえず、ぼくが用意できるのは彼らくらいです」

「そうか...きみらだけでは無理だ、もっとクレバーな知人はいないのか」

「知っているのはこれくらいです、あと、内のかみさんにも声をかけましょう」

「ま、よい、全員に伝えてくれ、村長の家を放火し、出てきた奴らを捕まえて、私に届けてくれ。それから、協会から応援を頼むだろう、それでどうにかやってくれ」

「はい先生」

このようにして小林は取締局から追われる男と村長、そして独自に集めた協会の動きで、確実に彼らが自分のところに来ると考えた。

妻はしゃがんでいた。

「そうだ、もっとライトを近づけて」

はにかんだ妻の顔を見ると小林は興奮した。

「聞いてくれ、協会員が動いてくれそうだ」

妻は一言もしゃべらず、肯くだけであった。外科手術で声帯を取ったためである。

村長の家は成長している。この間までなかった中二階が今朝階段を上ると増えていた。数段降りると新聞紙が敷き詰められており、六畳ほどの部屋で、天井がとても低かった。

一階に降りると村長が窓辺にいた。村長に増築したのですかと訊くと、全く知らないという返事であった。

村長は陽が差し込む窓辺のソファに寄りかかって、ルーペを手に持ち、手紙を苦勞して読んでいた。そのルーペは孫が悪戯をして、マジックペンで落書きをされていたため、視野は殆んど無いはずだった。それにもかかわらず村長は手紙を読んでいた。テーブルには緑茶があって、手紙の束はかなりの量であった。その手紙の束や緑茶の前には返事を書くための万年筆と柔らかい紙質の便箋が置かれていた。返事は一通読むごとに一通、というぐあいに規則のように決まっていた。

「こいつは私に書いてこられても困るね」といった手紙は封筒に担当課名を書き入れて、ソファわきのダンボール箱に放り込んでいった。

村長の午前中はこうした返信作業で終わる。常に順調に行くわけではない。孫が一人遊びに飽きてくると、相手は村長しかいないため、手紙を読んでいても、いったん作業をとめて、孫のために時間を割く。先日は機関車トーマスの英語で書かれた説明書を翻訳して教えるために、オックスフォードの辞典と格闘し、ひどい目にあっただけであった。

「じじ、さっき変な男の人いたよ」

「そういう時は、助けて！と叫ぶんだよ」

「まだいると思う」

私が「じゃ、見てきます」といって、村長の家をまわった。すると、村長の玄関に若い男がいた。チェックのシャツにペインターパンツを穿き、小豆色のニューバランスのスニーカーを履いていた。彼は灯油をかけている最中であった。

「何をお前はしているんだ！」

ニューバランスの男は恫喝され、逃げていった。私は追いかけた。すると、児童公園に若い男が逃げ込んだ。私がそこに入り込むと、治安取締局の男たちが待機していた。今度は逆に私が逃

げた。散らすだけ散らし、アメ横に入り込んだ。すると、若い男がしつこく追いかけてくる。

呼吸がしにくく、走るのも限界に近かった。切り返し、若い男に飛び掛った。すると、若い男は簡単に伸びてしまった。倒れる時に頭をしこたま地面に打ち付けたためである。長くここには危険だと思い、黄色いキャップを被り、地面に飛び込んだ。私は馬小屋に出た。

意識を取り戻した男は靴が片方しかないことに気づいた。

「だから最初っから嫌だったんだ、帰ろ」

アメリカ屋の前から少し手前にこの男の靴が転がっていた。それを拾うと、中に小石が入っていないことを確かめ、ゆっくり履いて、帰宅した。

「変な人ってどんな人だった？」と村長は孫に聞いた。

「よくわかんないんだけど、写真を撮るっていうんだ。ダイガクに行っているっていた。」

「大学生か」

私は「弱々しい男でした。失神してしまいました。」と村長に言った。「それと、玄関に放火しようとしていました。」

「だれだろうかね」

油屋はイライラしていた。

「奴は馬鹿だ、家に帰ってきたから収穫を聞いたら、オシャカだった。今から研究を始めるから、帰ってくれ、と言うのだ。研究は『美空ひばりの子役時代とえなりかずきの共通点』だそうだ。」

病院長の息子は煙草を盛んに吹かし、

「じゃ、ぼくがやってみますよ」という。それにしてもヘービースモーカーで換気扇が二つフル稼働しているのに、部屋は黄色い煙で曇っていた。油屋が

「少し考えろよ、健康を推奨するんだろ、医者っていうのは」

「ま、これはね、止めにくい薬物依存で」と息子は言う。

「さて、どうするかね」

彼らは三日間考えて、結論が出なかった。

「悩むより実行だ」そう言って、息子は部屋を出た。

協会員は公園で集会を始めた。たいがいは博愛協会の著作読書会であった。あるいはまた昆虫鑑賞会を夕暮れになると、ひっそりと開くのであった。クモやアリを主に彼らは飼育していた。ジャムの空き瓶にそれらを入れては持ち寄って、奇妙な男が裸電球をかざして、その灯りのもとで鑑賞会を楽しんでいた。そういったことが彼らには健全で善い行いとして広まっていた。

私は村長の家を出て、新宿にいた。シンジユク・スーパーマーケット通りを右に曲がった所にバーが一軒あった。店内は不思議と静かだった。マスターは鍵の束をカチャカチャいわせてセロリを仕入れてきた帰りだった。ストライプのBDシャツにクルーカットで清潔な印象だった。先客と話し出した。

――たぶん飲んだくれのやりかただよ。

――そうおもう。

――油蟬が鳴いていた。街路樹で。

――夏だ。

先客と会話にならない会話をし、

――そいつはジャパンのスペルをjapenと書いた。自慢気にApeが入っているからなといった。

私は店を出た。飛びぬけて晴れ渡った青い天空には白雲のひとつの陰りもなく、浮上バイクが一台通過していった。フランス人のカップルとすれ違った。青い月が濁ったコンタクトレンズのように空に貼り付いていた。

私はしばらく歩きつづけた。ビル街の裏通りを歩いた。Aラインコートを羽織ったOLが通過すると、香水が花の香りのような心地よさを気前よく振舞っていた。コツコツとパンプスが挑発的な脚の器となって、目の前を去っていく。足を止め、OLが振り返り、誘惑をし、親しくなった。

遺体には花を入れる。白菊のにおい。それと同じく彼女からは甘い花の香りが放散し、脳は性的に帯電してしまいすっかり見えない拘束状態になってしまった。もう言いなりだった。彼女はフェミニスト不要の考えの持ち主だった。

――あたしの脚でイチコロだよ

そんな彼女のストッキングで隔たれている場所へ早く達したく、舌を必死に使うが、何の感触もない。虚しい舌の動きはストッキングのみを触れつづけているだけだった。

――これが夢の正体さ

OLは物音がすると、驚いて、服を急いで着た。水の飲めなかったマラソン選手のような私も服を着た。開いたドアのむこうにOLの踵が一瞬見えて、消えた。持っていた物が砂のように砕けた感じだ。

一瞬目覚めた時、馬小屋の中で眠っていたらしく、右手には山のような馬糞が積もっていた。

村長が大きな声で私を呼んだ。私は手を消毒し、村長の部屋に出た。

テーブルには伸びきったゴム縄のようなものが置いてあった。

「なんですか」

「これだ、ポストに入っていた。」村長が拾い上げ、ぶらぶらさせている。

「なんでしょうね？」

「知らん」

「動物の組織のようですね」

「男女に見せるか」

「そうしましょう、医学を修めているでしょうから」

私たちは再び、心理カウンセラーに会いに行ったが、この前殺されかかったことから大変機嫌が悪かった。

「で、今度はなんですか？誘惑とか、もう嫌ですからね」

「そうじゃないんだ、これなんだが」と、村長が紐らしきものを渡す。

心理カウンセラーは鬱陶しい感じに紐を見た。

「これですか？たぶん静脈の一部でしょう。」

「こいつがポストの中に入っていた。」

心理カウンセラーは無視をして、見解を続けた。

「静脈の一部。で、たぶん足の静脈で、静脈瘤のために抜き取ったのでしょうか、それです」といって、静脈を渡す。村長は

「なんで、そんなものが...」

「知りませんよ、悪質な悪戯でしょうが、医療関係者しか入手できないでしょう、医者じゃないですか？」

「でも、なんで？」

「知りません」

後味の悪い思いをして、私たちは帰った。村長は、誰の仕業か盛んに聞いてくるが、私も分からない。気味が悪いので、ごみ箱に入れた。

博愛協会の建物にその女の子は幽閉されていた。足のサイズは22.5で、ピンクの布製のスニーカーが可愛らしい。華奢で小作りで、白色人種には見られない黄色人種特有の愛らしさが出ていた。協会内部で成年を活気付けるために象徴が必要だった。窓に雨が伝わっていく、その影が女の子の頬に影を落とし、涙のように見える。協会の青年は協会員数を増加させなくてはならず、内部の年配者や役員にとっては関心をよせる問題であった。学校から払い下げた「シ」と「ファ」の出ないポンコツピアノで、協会を称える歌を覚えさせられていた。

協会員への働きも小林は絶やさなかった。そのため小林の映像の入ったディスクを買いあさってまで回収していった。たしかに拳で殴打しているのは小林だったが、顔を画像処理をされているので分からないのだが、「小林先生の名誉のため」として、ディスクの回収に力を入れていった。そのころの協会新聞に「醜い肉」という言葉の入った詩が載った。

「醜い肉」

銀のナイフで裂かれ

食卓に上る

善き肉

善き血潮は清き水にて流されて

鬼の肉

家禽の餌

善き人それを口にせず

悪しき人すら口にせず

鬼の肉

それは醜い

ガード下の床屋は繁盛していた。客が小さな丸椅子に腰をかけ狭い店内で待ちつづけている。私が壁にもたれ、順番を待っていると、黒いサルの手が肩にかかった。振り向くと誰かは知らな

い男が笑っていた。私の順番になった。床屋はハサミを入れるたびに同一人物がころころ変わる。女になったり、男になったり。最後の仕上げにはいった。

するとその床屋は「終わりましたよ」とにこにこして声をかける。そして、床屋はシャツを持ち上げ、腹を出した。腹にはドスで刺された跡が二ヶ所残っていて、他の皮膚には横書きで文字が刺青されていた。どこの言語でもなかった。私は目を細め解読しようと試みるが不可能であった。

床屋を後にして、人気のない通りを長く歩いた。野原に出て、太い木が伸びていた。その下は乾いた土でふんわりしていた。葉が堆積し、土を被っているためだろう。踏むと気持ちがいい。地図を広げると南極と月の地図で、全く役に立たない。右に旧式の野球場があり、その野球場はもちろんだーム式でなく露天で、急な勾配の外野席の裏側がせり出していた。野球場からフルボリュームの声は割れている。何を言っているのか分からないが、何か士気高揚の怒鳴り声のようだった。音楽隊の音楽もひどい音をしていた。道端にはロシア語で書かれた警視庁職員募集のリーフレットが捨ててあった。

また、夢の中の夢だ・・・

小林に連絡が取締局から入った。

とりあえず村長と殺人被疑者それに村長の孫と思われる小児、計三名を確保することができた。一方心理療法士は逮捕には至らなかった。貴殿の派遣した協力者の行動は評価できたとしても、事態はこじれ、強姦未遂事案となった。事案の背景は協力者は心理療法士が事務所を開業している固定式ビルディングにて、心理療法士の説得に向ったが、欲情に至り、強姦未遂を引き起こしたものと思われる。

協力者の解放することと当該事案との相殺を図ろうと考えている。当然村長以下三名は解放するのが相殺との調整を図る上で妥当と判断した。よって、三名の解放をすでに行った。

「役立たずめ！」小林は怒鳴ると、「ええい、こんどは油屋しかいない！」

食堂の二階で油屋夫妻は大喧嘩をし、鎮まったところ小林から連絡が入った。

油屋は意気込んで、「こういう時にはな、これを使えばいいんだよ、あいつらときちゃ変に考えっからダメなんだよ」女房は「馬鹿だね、お前は、おっちゃんじまえ！」と言うが早いか村長宅に向かった。

再び小林のもとに取締局から次にいう住所に至急来て欲しい、と連絡が入った。小林が駆けつけると、取締局が何名か、空中警察が来ており何かが中央にいるらしく、取り囲んでいた。油屋は包丁を持った手を上に捻り上げられて確保されているのであった。小林はその光景を見ると、情けなくなって、ものすごい怒りが湧いた。

そこで、院長の息子、大学生、油屋が小林の拷問部屋に呼ばれた。

「もう話す事はない！」と怒鳴りつけ、彼らをバラバラに切断し、寸胴鍋に放り込み、煮てしまった。しばらくして、ぐつぐつ湯気を立てる寸胴鍋を小林は持ち上げると、「こんなもの、誰が食うか！」と言って、下水に捨ててしまった。

関係者各位

## 最終報告

村長、殺人被疑者のみ通常の逮捕ではなく、別件にて取り調べることを念頭に事情聴取を行うことにした所、村長、殺人被疑者を確保することができた。小児に関しては確保の要件を満たすことはなく児童福祉事務所へと管轄が変わった。心理療法士は参考人聴取という形をとった。村長の功績を勘案し、功績を評価、斟酌したとしても、犯人隠匿として十分要件が成立し、逮捕が可能となった。一方参考人聴取としての心理療法士に関しては再教育の施行を逃れた事実の証明を欠いた場合、逮捕することは困難である。したがって事実の証明が必要になる。そのため、この通知が届いて六日以内に当局に出頭をし、事実の証明をすることを要する。尚七日を経過した場合には心理療法士は解放されることとなる。

治安

取締局文書課

以上

小林は事実の証明が如何に困難かを知っていた。それは以前捕まらない火傷を負わせた男を捕まえてはならないからであった。六日が無情にも過ぎた頃には、心理カウンセラーの逮捕を諦めるしかない、その分村長らを苦しめてやろうと考えた。

協会の建物はキャベツ畑が延々と続く場所を臨むようにして建てられていた。建物自体が統一されておらず、縦に伸びた小さな空間の集まりである別館は各階に教室が配置され、そこは協会員の教室で、小林の著作について解説がなされ、テストされる場所である。本館一階は広々しているが長細く、二階は極端な立方体で、歯科医院が入っていて、三階は一階ほどではないが広く、ところが今度は垂直に伸びていた。最上階の小屋みたいなところが拷問部屋であり、外から見たその窓は気が狂ったように光っているが窓の内側には板が打ち付けられていて、役に立たないガラス窓だった。雨が常に降っていて、それでいて常時青白い空のもと、いつ倒れてもおかしくない建物が歪に建てられていた。

私たちは一階のソファが何個か並ぶ、駅の待合室のようなところにいた。事務員が笑顔で近づいてきて、銀のトレイを出した。

「ここは湿気ましてね、近頃陽気がたいそう不順ですね、どうぞ風邪を召されませんよう」といって、「規則ですので、申し訳ないんですが、ここに所持品を置いてください、貴重品などですと大変でございませよ」この奇妙な口調は私たちが黄色のキャップを出すまで延々と続き、しびしびキャップを出すと、事務員は笑顔で頷き、納得して帰っていった。しばらくして白衣を着た看護婦が来て、

「はじめでですね。簡単な身体検査をして、先生に診てもらいますからね。そう、緊張しないで」と優しく話し掛けてきた。

数日私たちは和式の部屋で寝起きをした。村長は不安ではないか、と訊くが不安どころか、たぶん殺されるんだらうと私は話した。

一階のソファで自販機から買ったコーヒーを村長と二人で飲んでいると、ピンクの布製のスニーカーを履いた女の子が先ほどから私たちを見ている。そして近づいてきた。彼女はポケットから何か出してきた。

「見て、これが私の昔の写真よ」

世界平和のプリントされたTシャツを着た女の子だった。

「ユキかい？」

「そうよ」

「顔が違うんでね」

「うん」

「なんでまたこんな所に？」

「アイドル」

「きみが？」

「そうよ、変な歌を毎日歌わされるの」といって塞ぎこんでしまった。

「おれたちはこれで終わりだ、始末されるんだよ」

「頼んでみる」

「無理だよ」

「殺させないわ」

「正式な処分なんだ」

「いいえ、今あの馬鹿に会ってくる」

「今度はお前がやられるぞ」

「大丈夫よ」

と言って立ち上がると、身長が高く筋肉の発達した係員がやってきた。そして見上げる村長と私に向って、てこずらせなきゃ、優しくする、そうでなきゃ、抱え上げて、叩きつけてやる、と言った。

村長は足枷と手錠をされ、最上階の手前のフロアまで連れて行かれた。

連れてこられた所は、一角に拷問部屋へと続く長い階段が口を開けて待機している空間だった。小林が準備を整えたと思え、階段を降りてきた。係員は、一階に向かった。

「まずお前からだ」と村長の腕を小林は引っ張って、長い階段を引きずられ、やがて視界から消えた。

第2部終了